

## 漱石作品の『指輪』

Junko Higasa 2014.3.3

『虞美人草』第12章にこんな表現がある。『指の太さに合わぬ指輪は貰っても捨てるばかりである。大き過ぎても小さ過ぎても躰には出来ぬ』この「指輪」は「夫」のことである。

まずこの作品で、藤尾は小野さんという小さな指輪に付いている宝石が気に入って、無理に指にはめようとしたが出来なかった。はめれば指輪は壊れて宝石は転がり落ちるばかりである。

次に『それから』の三千代は少しきついけれど何とか指に入る平岡という指輪をはめた。けれどその圧迫に耐えられず、代助という大きな指輪に交換した。しかしその後の『門』では、やはり指にしっくりなじまず寂しく思ったが、捨てることは許されず、もう交換がきかなかった。

そのあとの『明暗』では、お延は分不相応な大きな指輪を手に入れる。けれど緩い指輪はいつ指から抜け落ちるかわからず、始終心配する羽目になる。

このように漱石作品には指輪＝結婚という構図がある。夫婦とは「破れ鍋に綴じ蓋」相応しい相手というものがある。『虞美人草』の宗近君に言わせると藤尾は外交官夫人にピッタリだ。気弱な小野さんには優しい小夜子が似合う。厭世的な欽吾には生活力逞しい糸子が必要だ。漱石の「博士になれば娘を嫁にやる」問題はかなり根深い。漱石は「自分に合わない指輪を扱ふとろくなことにならないよ」と言う。